

---

# The magic world adventure

鬼人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The magic world adventure

### 【Nコード】

N4968Z

### 【作者名】

鬼人

### 【あらすじ】

科学では起こりえない事、それを人は何と呼ぶ？

人はそれを魔法、あるいは超能力、またあるいは幻想と呼ぶ。

この物語は科学の世界とはまた違う世界、魔法の世界で起こる出来事である。

## ブローグ ある雨の日（前書き）

誤字や脱字が多いと思います。

何よりつまんないと思います。

そんなんでも、読んでいただければ光栄です。

## プロローグ ある雨の日

その日は雨だった。周りの音をすべてかき消すかのように、土砂降りの雨が降っている。

少年は血の海の中にいた。なんで俺はこんなところにいる？つい今まで、家族と夕飯食べてたじゃないか。それなのになんでこんなに体中が痛いんだ？なんで…

「おらっ！どうしたクソガキ！生きてんだろ？」

少年は腹を蹴られて俯せになった。くそ…何なんだよ、こいつ。

少年は立ち上がろうとしたが、それすらできなかった。駄目だ、体に力が入らない。視界もぼやけて殆ど見えない。

だが、誰かが少年の見覚えのある人物を取り囲んでいるのは見えた。

頼む、やめてくれ。そいつは…そいつだけは…

「さあクソガキ、残るはお前だけだぜ」

自分に伸し掛かって銀色に光る剣を振り上げている男が、少年にはハッキリ見えた。

俺は…ここで死ぬのか？別にいい、もう誰も残ってないんだから…

『お前はここで死を選ぶのか？』

突然周りの時間が止まり、少年の目の前は真っ暗になった。

## 第一話 二人の冒険者

竜の地の最南端に位置する小国、フェアーナ。その首都であるレッザンの街の中を、ナウル・テスフィードは一人の男を追いかけて走り回っていた。いや、走り回っていると言うより、少々表現がおかしいかもしれないが、「遊んでいる」と言った方がいいだろうか。

ナウ「ハッハッハ！どうしたおっさん、もう逃げないのか？」

民家の屋根の上から見下ろしながら言うと、男は腰を抜かして石畳の地面の上に座り込んだ。

男「くそっ！化け物め！」

そう言う男は、涙目になっていた。

ナウ「なんだ、もう終わりか？」

ナウルはニヤニヤ笑いながら屋根の上から飛び降り、男の目の前にスタツと着地した。

ナウ「逃げないのか？折角「俺から逃げたら捕まえない」って言うてるのに」

男「ふざけんじゃねえ！家の屋根の上にヒョイヒョイ飛び乗るような奴から逃げられるわけねえだろ！」

ナウ「いや、屋根に飛び乗ったくらいで驚かれても困るんだが…って言うか、あれぐらいなら誰でも出来るだろ？」

首を傾げながら聞くと、男はクワツと目を見開いた。本当に不細工な顔だ。

男「俺はお前みたいな化け物じゃねえ、普通の人間だ！普通の人間が垂直に五メートルも飛べるか、ああ？大体こっちは喋るのもやつとなのに、なんでお前は息切れ一つしてねえんだよ！」

ハツハツハ、よくあるよくある！と笑って受け流そうとしたが、男は「無えよ！」と怒鳴り返してきた。

ナウ「とかなんとか言いながら、ベラベラ喋ってるじゃねえか。それより、もう逃げないのか？俺はまだまだ行けるぞ？」

男「畜生！まさか噂に聞いた女神の騎士団の冒険者がここまでの化け物だったなんて…聞いてねえぞ！」

なんだ、このおっさん俺等のこと知ってるのか。

ナウ「そりゃ、おっさんには一言も言った覚えないからな。大体、何十人も賞金首が俺達に捕まってるのに、なんで自分は大丈夫なんて思っただんだ？」

男「別にそんなことは思っただけだ！ただ噂に聞いてただけだ。それに俺は中央平原の方から来たから、あんたらのことは殆んど知らねえんだ！」

ナウ「中央平原の方じゃなくても、女神の騎士団の情報は殆んど外に流れてないから、知らなくて当たり前だ。で、本当にもう逃げないのか？」

ナウルが性根の悪い笑みを浮かべると、腰を抜かしていた男は慌てて石畳の上に膝まづいた。

男「なあ、頼むよ！今回だけでいいんだ、見逃してくれ！」

半泣きになって顔をくしゃくしゃにしながら、男はナウルの足元にしがみついた。情けないにも程がある。大の大人が、自分の半分も年齢がいつてない青年に、泣いて懇願してどうすんだよ…

ナウ「取りあえず、その汚い顔を近づけないでくれ。それから、今更泣くぐらいなら、最初っから犯罪なんかに出すんじゃないかよ」

冷たい目で見下ろしながら言うと、男は不細工な顔をさらにくしゃくしゃにした。

男「仕方なかったんだ！どうしても金が欲しくて…飢えて死にそうだったんだ！」

男は、ナウルの近づくなという忠告など全く聞いていなかった。そのまま死んだほうがよかったんじゃないか？と巫山戯て言おうとしたが、流石にそれは酷いと思い自重した。

ナウ「金がなかった？飢えて死にそうだった？何を都合のいいこと言ってるんだ、ハゲが。強盗事件何回も起こして、指名手配されてるくせに」

男「一回に盗れる金額が少ないんだ。それに食費とかでどんどん無くなってくし…」



ナウ「真面目に働こうとしろよ！」

男「過去に一回強盗やったっただけで、指名手配されて働き口なんか見つかるわけないだろ！」

ナウ「…それもそうだな」

確かに、このおっさんの言うことも、分からないでもない。食べていくことが出来なくなった者が取る方法は二つ。真面目に働くか、犯罪に手を染めるかだ。まだ二十代やそこで、親や頼れる兄弟がいるならともかく、このおっさんの年齢からしてそんなあてもないだろう。このおっさんは一番手っ取り早い方法を選んだのだ。

ナウルは少し後ろに下がり、男をしつかり見た。ボサボサの髪の毛に、何度見ても不細工な顔。薄汚れた服を着て、腰からは長剣が下がっている。よく見ると、体もかなりがっしりしていた。

ナウ「おっさん、見たところは元傭兵か？ 剣持ってるし、年の割に体力あつたし」

今思ったのだが、その腰についている剣で戦おうとは思わなかったのか？

男「ああ、一応はな。それでも、中央平原むいっの方じゃあ、そこそ名の売れた傭兵だったんだぜ」

男は必死にナウルの気を逸らそうとしている。逃げるチャンスを探っているのか、それとも俺がおっさんを捕まえるのを忘れるかとも思ってるのか？ もしかして、ただ開き直っただけか？

ナウ「まあ、そんなことはどうでもいい。逃げる気がないんなら、大人しく捕まってもらうぜ」

ニヤつきながら立ち上がろうとしていた男の顔が、再びくしゃくしゃになった。

男「なあ頼む、頼むよ！今回だけでいいんだ、見逃してくれ！次にお前が俺を見つけた時は、その場で俺を殺しちまってもいいから！」  
駄目だ、このままじゃ話が進みそうにない。このおっさんは口が開く限り、同じことを言い続けるだろう。

ナウ「仕様がねえな。本当に今回だけだぞ」

男は不細工な顔を上げ、目を見開いてナウルを見た。

男「本当に逃がしてくれるのか？」

ナウ「ああ、いいよ。そこまで言うんなら逃がしてやる。とっとと消えろ」

ナウルは虫を追い払うように、しっしっ手を振った。これで男は背中を向けて一目散に逃げ出す…かと思ったが、なぜか男はニヤニヤ笑いを浮かべてその場から動こうとしなかった。

ナウ「なんだよ、気持ちわりいな。とっとと消えろっての」

男「お前、年はいくつだ？」

年？なんだってそんなこと聞くんだけ？

ナウ「二十一だけど、それがどうかしたのか？」

男「そうか、二十一か。若いのにそんな仕事してたら大変だろ」

ナウ「何が言いたい？」

男はニヤニヤ笑いを浮かべたまま、ナウルに近づいてきた。

男「実はなあ、いい仕事を知ってるんだ。冒険者なんかよりもずっと儲かる仕事だ」

ナウ「いい仕事？」

男「そうだ。俺みたいな犯罪者が、大勢集まって組織を作ってる。そこにお前も来ないか？お前みたいに強い奴は大歓迎だ」

ああ、なるほど。確かにそれは儲かりそうだな。ナウルは男の真似をするように、ニヤリと笑った。

ナウ「そいつはいいね。正直、俺もこんな仕事うんざりしてたんだ。是非そこに入れてくれよ」

男はニヤニヤ笑いをやめ、代わりに極悪な笑みを浮かべた。

男「ハッハッハ！流石だ、解ってるじゃねえか。よし、じゃあ俺について来い。サードストリートの古いボロ宿にアジトがあるんだ。ここは…セカンドストリートの住宅地だから、まっすぐ行けばそのままサードストリートに出るはずだぜ」

男は早速歩きだした。ナウルはその後ろについて行く。

ナウ「へえ、そんなところにあるのか？」

男「ああ。今は色んな犯罪者も合わせて百人近く集まってる。大物の賞金首とかはいねえが、質より量だからな」

ナウ「へえ、そんなにいるのか」

男「いや、あれだけの人数集めるのは苦労したぜ。なんせ普通の人間じゃなくて犯罪者を集めてんだ……」

トンツ

ごく短い小さな音がした。だが、男はその音に気付かなかった。何故なら、音を聞く前に男は既に気絶していたからだ。男の体がグラツと傾いで、石畳の上に倒れた。ナウルが首に手刀を入れ、気絶させたのだ。

ナウ「まったく、そんな危ない仕事に手出すわけねえだろうが、馬鹿か！それ以前に初めて会ったやつに、ベラベラ喋ってる時点でアウトだ」

ナウルは倒れている男を担ぎ上げると、肩に乗せた。犯罪に手を染めるほど困ってないっての。それに冒険者としての仕事だって、十分楽しんでる。逃げ回るアホな賞金首を捕まえることとかは、特に楽しいなwww

ナウ「それにしても、このおっさん良いこと教えてくれたなあ。サ

ードストリートの古い宿に犯罪者百人か、潰し甲斐があるじゃないか」

？「おい、ナウルー！」

突然名前を呼ばれて、ナウルは声のした背後を振り返った。二〇〇メートルぐらい先だろうか、誰かがナウルの方に向かって走っている。

あゝ、そうだった。おっさん追いかけるのに夢中だったから置いて来たんだった。

暫くすると、ナウルのパートナーであるカチュア・ドラコニクスが、息を切らしながら追いついた。

カチュ「ハア…ハア…あんた、速すぎでしょ…」

カチュアは額にうつすらと汗を掻いていた。ナウルと同じ二二歳で、綺麗な顔立ちに似合う長い金髪の持ち主だ。

ナウ「仕様がないだろ。お前のペースに合わせてたら、このおっさん逃げちまうんだから」

カチュアは肩で息をしながら、顔を上げた。

カチュ「ハア…ハア…走るの苦手なのよ」

ナウ「昔っからそうだもんな。それより、おっさんは捕まえたからギルドに戻るぞ」

カチュ「ハア、ちょっと酷くない？折角ここまで走ってきたのに」

ナウ「酷くない、遅い方が悪いね」

ナウルは意地悪く笑いながら歩き始めた。仕方なく、カチュアも後を追う。ナウルの性格が悪いのも昔からだ。

カチュ「その人、どうやって捕まえたの？」

カチュアは気絶している男の顔を見ながら聞いた。

ナウ「どうやって、って言われてもなあ。ちょっと油断させてから隙突いて気絶させたんだ」

カチュ「フーン、そんなことしなくてもナウルなら一瞬で終わったんじゃない？」

ナウ「まあ、そうだけどそれじゃあ面白くない。逃げ回ってるのを追いかけるのが、楽しいんじゃないか」

カチュアは苦笑せざるを得ない。性格の悪さも、ここまで来ると少し怖い。

カチュ「楽しいかどうかは知らないけど…って言うか、私が来るまで結構時間あったでしょ？何やってたの？」

ナウ「ああ、そうだ。そういえばこのおっさんに良いこと聞いたんだ」

カチュ「へえ、何聞いたの？」

ナウ「このおっさんの話によれば、サードストリートの古いボ口宿に犯罪者が集まって組織作ってるらしい」

カチュ「その話：本当なの？」

カチュアはかなり訝しそうな顔をしている。まあ、信じないのが普通だろうな。

ナウ「俺が見た限りじゃあ、嘘言ってるようには見えなかった。なんせ、「お前も来ないか？」って言われたからなwww」

カチュアは一瞬心配になったが、その男を肩に担いでいるということとは断ったということでもいいのだろう。

カチュ「そこまで言われたんなら、本当かもね。じゃあ、帰ったらすぐそこ行くの？」

ナウ「面倒だから報告だけして他のやつらに行かせる。百人ぐらい集まってるらしいから、油断しないように言っとかねえとな」

カチュ「あんたも行きなさいよ……」

二人はセカンドストリートを抜けて、街のメインストリートに出た。既に日は高く上り、昼時を少し過ぎたぐらいだ。首都だけあって人通りも多いため、中年の男を肩に担いだナウルは道行く人の視線をすべて集めていた。道で遊んでいる子供も、立ち話をしていた近所の奥さんも、買い物していた若い娘も嫌でもナウルの方に視線が来ていた。

ナウ「さあて、帰ったら酒でも呑むかな」

カチュ「あんた、堂々としすぎでしょ……」

ナウルと違ってカチュアはかなり恥ずかしそうだ。隣にいただけ、カチュアにもかなり視線が集まる。

ナウ「堂々としてればいいんだよ。おどおどしてたら逆に恥ずかしい。どんな時でも、余裕を持って損はないぜ？」

カチュ「いや、まあ……そうだけど……」

ナウ「それに俺は賞金首を捕まえたんだぜ。堂々としてても問題ないだろ」

カチュアはハアーツとため息をついた。残念だが、反論できないのが悔しい。何を言っても、ナウルは自分の考えを変えないだろう。

カチュ「それにしても、犯罪者が百人も集まってるなんて。まだまだ物騒ね」

ナウ「いや、案外そうでもないかもしれないぞ」

カチュ「ん？なんで？」

ナウ「最近、賞金首が減ってきてる。このおっさんの教えてくれたアジトにいるのも、もしかしたらレッザンにいる最後の賞金首かもしれない」

カチュ「だといいいんだけどね」



ナウ「まあ、俺は報告するだけだ。後は他に任せる」

ナウルはそう言いながら、ギルドの扉を開けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4968z/>

---

The magic world adventure

2012年1月14日16時54分発行